

第55回

イスファハン／イラン
Isfahan Iran

再臨と樂園を巡る闘争

リクルート=スタディサブリ講師 村山 秀太郎

突如、UFOのごとく

イスファハンからテヘランに戻る道中、ふと眠りから覚めボーッと夜の闇を眺めていたら、突如遠くにUFOが着陸しているような盛大にライティングされた物体が視界に入ってきた。それが次第に大きくなって、乗っているタクシーがその横を通ることが分かったので、ドライバーに「あれは何？」と聞くと「ホメイニ師の墓だ」と言うので行ってみた。1989年に師が死去した翌年のことだ。数日前にイスラーム教シーア派の聖地コムへ行った時にもその横を通ったはずなのに、昼間だったせいか気付かなかったようだ。ホメイニ廟^{びょう}はテヘラン南郊に位置する。



イマーム・ホメイニ廟

イランの殉教精神の源

「カルバラー・パラダイム」という言葉がある。預言者ムハンマドの孫で第3代イマーム(シーア派の宗教指導者)だったハーシム家のフサインが、イラク南部のカルバラーにて^{きゅうてき}仇敵ウマイヤ

家の大軍に包囲され、家族と少数の軍勢と共に全滅した出来事を「カルバラーの悲劇(680年)」と呼ぶ。この「悲劇」が、弱者が強者に抵抗し、命を賭して正義を示す殉教の精神へと昇華した。

それがイランの核開発や安全保障戦略において、敵の攻撃を“国家存亡の危機”と捉え、たとえ敗北が予想されても無条件降伏せずに徹底抗戦する戦略の基盤にある、との分析がなされている。

世界最大の広場にて

実際、「アシュラー」と呼ばれるフサインの追悼祭では、この悲劇を追体験して信仰と結束を強化する。イランの核施設があるという件でよく報道されるイスファハンにある“世界最大の広場”と名高いイマーム広場(メイダーネ・ナクシェ・ジャハーン)では、棒状のものを手に身体を軽く打ちたたきながら広場を一周するパフォーマンスが行われる。苛烈なものになると、自分の自転車のチェーンをはずして打ちたたき、先端にナイフをつけたムチで、自らの裸の上半身を卒倒するまで打ちたたきという儀式まで存在する。

カルバラー・パラダイムは、シーア派信徒に強固なアイデンティティと、不正に対する抵抗意識を与え続けている。イランがシーア派なのは、サファヴィー朝(1501～1736年)のアッバース1世というシャー(王)がそのイスファハ